

Ⅱ「天満橋」と天満橋南詰地域

1. 「天満橋」について

- ・江戸時代から大川に架かる公儀橋(幕府が直轄管理)で、下流の難波橋、天神橋と共に”浪華三大橋”と称された。
- ・架橋時期は不明であるが、「大坂冬の陣配陣図」(「僊台武鑑」所収)に「てん満橋」の書入れがあることから、既に豊臣時代に架けられていたものと思われる。
江戸時代を通じて架橋地点は現在地より一筋東であったが、明治11年(1878)に現在の谷町筋と天満橋筋を結ぶ位置に架け替えられ、明治18年7月の大洪水で木製の橋が流されたため、復旧時に鉄橋とされた。また、橋の下の大川には明和8年(1771)に、寝屋川・鯉江川との合流地点の逆流を防止するために「将棊島」と呼ばれる堤防が築かれ、それを跨いでいたが、明治42年(1909)の淀川改修工事によって将棊島もその姿を消した
- ・昭和10年(1935)12月、大阪市電(曾根崎天満橋筋線・明治44年7月開通)の往来による揺れが問題化したため、耐震構造をもった現在の橋(橋長=151m・幅員=19m)に架け替えられた。さらに、昭和45年には、天満橋交差点(土佐堀通)の渋滞緩和のため、上部に跨道橋が建設され、わが国ではじめての珍しい2階建ての「天満かさね橋」になっている。

2. 渡辺の津と「渡辺橋」および「渡辺党」

「渡辺津(ワタベノツ)」

- ・渡辺津は、“渡りの部”または“渡りの辺(へ)の津”あるいは“窪津(クボツ)”と呼ばれ、「この渡辺の地は、坐摩神社の旧地にして、同社が遠く仁徳天皇の皇宮とともに此の地に創祀せられ、天正年間、大坂城築城にあたって移り、現在、同社の御旅所になっている一帯の地がそれである。」とされており、現在の天満橋から天神橋の間にあたる。
- ・平安時代中期以降鎌倉時代に至って、四天王寺・住吉大社あるいは遠く高野山および熊野神社への参詣は隆盛を極め、その要路として渡辺津は大いに賑わった。京より淀川を下り、ここより陸路によったもので、帰路もまたその逆であった。
あわせて、南海・西国から京に送る物資の荷揚・集散地として輻輳するに至り、“津料”として積荷の通過料を徴収する関所も設けられて幕府の財源にも充てられた。

「渡辺党」について

- ・平安時代後期、嵯峨源氏の”源 綱(渡辺 綱)”を始祖とする豪族で、此の地に荘園を有して一大勢力を誇った一族が、「渡辺党」である。
『大阪市史』には、「源頼光の臣・源綱、養母摂津渡辺に住するを以て渡辺を氏と為すといひ、又、綱の曾孫・傳に至り、渡辺の総官となり。渡辺に住すといへば堀河・鳥羽両朝頃より一族此地に蟠居したるなるべし」と記されている。
- ・武士団としてもその蛮勇ぶりが知られており、もともと港に立地することから、その一族は水軍として日本全国に散らばり、瀬戸内海の水軍の棟梁となっている。なかでも有名なのが北九州の松浦氏が率いる”松浦党”である。また、地元においては、渡辺家が坐摩神社・宮司の職を連綿と引き継いでいる。

(参考)

源綱(ツナ)は、嵯峨源氏の源融(トオル。嵯峨天皇の皇子)の子孫で平安時代中期の武将。摂津源氏の源満仲の娘婿の養子となり、母方の里である摂津国西成郡渡辺に居住して渡辺綱と称した。
”頼光四天王”の筆頭として剛勇で知られ、大江山の酒吞童子(鬼)退治の逸話が残されている。

「渡辺橋」と「渡辺の合戦」

- ・津(港)として栄えた渡辺であったが、現在の石町と呼ばれる台地から対岸の天満とを結ぶ「渡辺橋」が架けられていたことが知られており、江戸時代の『摂陽奇観』にも「八軒家の辺より上古・渡辺の橋柱を云々」との記述があり、享保年間(1716~36)に川床から古橋の橋柱が掘り出されたとされている。

また、建仁元年(1201)の後鳥羽上皇熊野御幸を記した『家長日記』(源家長)にも「渡辺の橋の上に行かふ駒の足音おとろおとろしく踏鳴らし…」の記述がある。

- ② 現在、中之島の堂島川に架かる橋の一つに「渡辺橋」があるが、この橋は元禄年代の架橋で、かつての渡辺津の繁栄に因んで名前だけ残されたもので、位置的にはかなり西に寄っている。

・この地は要津、要路として交通上の要衝であるとともに軍事上も重要な地であり、合戦の場としていくつかの記録が残されている。

その代表的なものが『太平記』にも描かれる「楠木正成(マサシゲ)の忠戦」と「楠木正行(マサツウ)の義戦」である。

「楠木正成の忠戦」(世にいう”渡辺の合戦”)

元弘2年(1332)3月に鎌倉幕府に反旗を翻した後醍醐天皇が隠岐に島流しとなったが、後醍醐天皇に忠誠をつくす楠木正成は、12月頃に挙兵して赤坂城を奪回し住吉・天王寺と進んで渡辺橋南詰に陣を敷いた。これをみた六波羅勢は5千の兵を差し向け、渡辺橋を渡って一気に攻め込んだが、あちこちに隠れていた伏兵が、六波羅勢を囲むように大量の矢を射返してきた。これに驚いた六波羅勢は、渡辺橋を引き返そうとしたが、その時には、すでに楠木勢によって橋板が外されており、六波羅勢は次々と川に落ち、残った兵はほうぼうの躰で京へ逃げ戻った。

「楠木正行の義戦」

正平2年(1347)11月、足利幕府は1万の兵で楠木正行討伐に向い、大坂の瓜生野で兵2千の楠木軍と対峙した。数に劣る楠木軍は幕府軍を二手に分散させておいたあと四(オリ)を使って本隊をおびき出し、挟み撃ちにして退けた。これをみた幕府軍は京に戻らんと渡辺橋に一気に殺到したため、多くの者が川に落ちて溺れるものが続出した。敵兵が川に流されるのを見た楠木正行は、「戦の勝敗は既についた。溺れている敵兵は助け、ケガをしている者は手当てせよ」と命じ、冬の厳しい寒さの中、川で溺れ死ぬところだった何百という敵兵が楠木軍の手で助けられ、楠木の手勢に加わった。



「小楠公義戦之碑」

この故事を讃えた「小楠公義戦之碑」が、平成20年3月に新しく整備されたた八軒浜船着場の西側、大川端に建てられている。楠木正成が明治以降「大楠公」と称されていたのに対し、息子の正行が「小楠公」と称されている。正平2年(1347)11月の戦いにおいて楠木正行が打ち負かせて川に落ちた敵兵を救助したエピソードを綴ったもので、正行の情け深い行為に恩義を感じた兵達は、その後、正行に仕えて翌年正月の四条畷合戦でともに討死したと伝えている。(碑文＝下記・参照)

3. 「坐摩(イスリ)神社」と行宮 大阪人は”ざまさん”の愛称で呼ぶ

・坐摩神社の始まりは、神功皇后が三韓征伐より帰還したとき、淀川河口の地に坐摩神を祀ったことによるとされており、創建時の社地は、渡辺津・窪津・大江などと呼ばれた地で、遷座後に御旅所が置かれた現在の中央区石町と推定されている。

豊臣秀吉が大坂城築城に際して、西横堀川に近い現在地(中央区久太郎町4丁目・渡辺)へと遷座し、旧社地であったこの地(石町)を行宮(御旅所)としたものである。

・『延喜式』によれば、祭神は5座で、生井(イキ)神・福井(フキ)神・綱長井(ツナガ)神・波比祇(ハヒキ)神・阿須波(アスハ)神とされ、前の3座は井戸の神、後の2座は竈神である。宮中では、坐摩巫(イスリノミカノキ)によって祀られる神で、『延喜式』によれば、坐摩巫には都下国造(ツゲノクニミヤツコ)の7歳以上の童女を充てるとされ、西から来る穢れを祓う儀式を行うといわれる。

また、都下とはこの神社が最初にあった淀川河口の地で、摂津国の菟餓野(トガノ) (“都下野”とも書く)、現在の上町台地一帯を指すと見られている。

・「いかすり(あかすり)」の語源については諸説あるが、坐摩神社では、「”居住地を守る”という意味の”居所知”(あかしり)が転じた。」と説明されている。

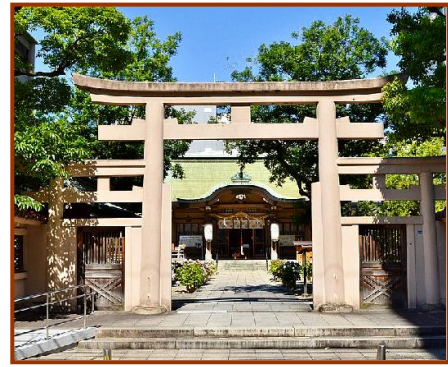
・神功皇后が新羅出兵の帰途にこの難波の津に着岸され石上に御腰を掛けられたとされ、「神功皇后の鎮座石」と言われる巨石が、旧社地であった坐摩神社行宮に祀られている。この伝説から、“玉躰が石に触れられた”として”坐摩”の名がついたとの説もあるが、これは文字の上から思いついた俗説にすぎないとされている。(『東区史』)

・なお、現在、坐摩神社のある地は、神社とお守りする氏子が渡辺津から移転してきたことで、町名も「北渡辺町」「南渡辺町」となり、昭和5年(1930)には「渡辺町」となっていた。ところが、昭和63年の旧東区と南区の統合に伴う地名変更の際、「渡辺町」は統合されて消えることと

なったが、渡辺姓の末裔で作る「全国渡辺会」が渡辺町の消滅に対し反対運動を起こしたため、丁目の次の街区番号に「渡辺」の名を残すことで決着をみたとの経緯がある。



「坐摩神社行宮」
(中央区石町2丁目)



現在の「坐摩神社」
(中央区久太郎町四丁目渡辺)

4. 「八軒家浜」

- ・江戸時代に京、伏見からの三十石船や淀川の荷客輸送にあたった過書船の発着場として賑わった所で、八軒家の名は、ここに8軒の船宿や飛脚屋があったことによるとされている。
8軒の船宿＝枳屋(戦後は食堂となるも昭和40年に廃業)、大和屋(戦災で廃業)、京屋(後述)、堺屋(後述)、大津屋、板並屋、有馬屋、銀屋
- ・平安～鎌倉時代、付近一帯は「渡辺津」と呼ばれ、京から舟で下ってきた熊野詣等の一行は、この地で船から上がり、陸路を四天王寺・住吉・熊野方面に向かった。

5. 京阪電鉄の開通と「天満橋駅」の開設

- ・明治43年(1910)4月15日に京阪電鉄の最初の路線として、大阪・天満橋 - 京都・五条間(46.57km)が開業した。当初計画では高麗橋付近を起点としていたが、大阪市が、「市街地の交通を市が掌握する」といった「市営モノロー主義」を打ち出していたため、折衝の結果、天満橋が起点となったものである。なお、大正4年(1915)10月には、運行区間が三条まで延伸された。
- ・「天満橋駅」は、谷町筋(天満橋筋)より東寄りに設けられ、当初は路面電車の停留所のようなものであったが、大正3年7月には、高床式ホーム(楕形3面4線)と駅舎が新築された。その後、下記のように寝屋川と大川との合流点が北側に寄せられてその西側が整備されたため、昭和7年(1932)3月、谷町筋と土佐堀通(京橋通)が交わる北東角に、楕型4面6線の旅客用ホームおよび貨物用ホームとドーム型天井を持つ新しい駅舎が完成した。東西に伸びるホームは南側が降車用、北側が乗車用とされ、ホームの東側に降車用改札口が設置されて、現在の京阪東口交差点から市電・バスに乗り換えていた。一方、切符売り場と乗車用改札口は、谷町筋交差点角の駅舎内に設けられ、駅北側には昭和8年9月、「京阪デパート天満店」(地上3階地下1階建)が開設された。(このデパートは、昭和38年の淀屋橋への延伸に伴って閉店された。)

・かつての「天満橋駅」



駅舎・入口



ホーム

淀屋橋への延伸の際、新「天満橋駅」は谷町筋の西側に移転して地下に設けられ、もとの「天満橋駅」跡地には、その後、「大阪マーチャライズマート・ビル」が建設された。

*京阪の「片町駅(野田橋駅)」とJR・片町線の「片町駅」

・かつて、寝屋川に架かる片町橋の北側付近に、京阪電鉄・「天満橋駅」の1つ手前の駅として「片町駅(もと野田橋駅)」があり、その斜め東南側に、当時の国鉄・片町線の終着駅である「片町駅」(片町橋北東詰)が、ほぼ並んで設置されていた。

・JR・「片町駅」は、明治28年(1895年)8月に浪速鉄道が当駅と四条畷駅間に開業した時、その終着駅として設置されたもので、その後、国鉄・片町線として引き継がれた。

駅舎は2階建て(ホームは地上)で、東に向かう京橋通が突き当たるような形で建っていた。

一方、京阪電鉄の駅は、明治43年開通時に「野田橋駅」として設けられたもので、当初は片町交差点の東側にあったが、昭和30年1月に専用軌道化された際、駅位置が交差点の西側に移されて「片町駅」に改称された。

また、大正14年(1925)に市電が駅西道路を南北に横切って開通したため片町交差点では京阪電鉄と市電が平面交差していた。(市電は、昭和43年に廃止された)

・京阪電鉄では、昭和44年の高架複々線化を機に「片町駅」は廃止され、JR・「片町駅」は平成9年3月の東西線の開業に伴って廃止、かわって少し西より(網島町)の地下に「大阪城北詰駅」が新設された。

・なお、「片町」の駅名は、駅前を通る京街道にこの付近では北側にしか家屋がない片側町であって、「京橋片原町」の町名だったことに由来するとされる。



国鉄・片町線の「片町駅」

○将棊島の南側・寝屋川の埋立

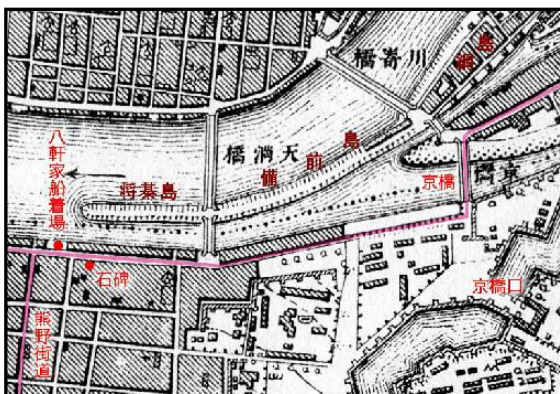
・寝屋川と鯉江川の合流点の北側には、都島区の網島から西方向に備前島および将棊島が天満橋の西側まで伸び、その先で寝屋川が大川に流れ込んでいた。

これは、淀川の水が寝屋川・鯉江川に逆流して水害を引き起こすのを防ぐため、天満橋の下流236間(約430m)余りまで築かれた隔流堤で、先端付近には明治6年(1873)に来日したオランダ人技師デ・レーケらの指導による粗朶沈床式水制工が施されていた。(現在、大川北岸の南天満公園に「将棊島粗朶(ソダ)水制跡」の碑が建つ。)

・その後、寝屋川は、もとの鯉江川との合流点付近で流れを北向にして大川に流れ込むように替えられ、その西側部分が埋立てられて、現在の大手前1丁目および天満橋京町の地が形成された。昭和4年10月、付け替えられた寝屋川に新しい「寝屋川橋」が架橋された。

(なお、網島の南側を流れる鯉江川は昭和5~6年の寝屋川の改修に伴い埋立られた。)

・従って、天満橋駅(旧駅を含む)や下記に述べる「OMMビル」、「松坂屋(現・京阪シティモール)」、「大阪キャッスルホテル」などは、この埋立地に建設されたことになる。



明治18年・測量図



現在の天満橋付近

○「谷町筋」と地下鉄谷町線について

・谷町筋は上町台地のやや西側の高台を南北に縦断する幹線道路で、筋の西側の通りはやや勾配のきつい下り坂が多くなっている。

天満橋交叉点(土佐堀通・天満橋筋)から天王寺区・阿倍野区近鉄前交叉点までの約4.7kmで、古くは狭い道であったが、昭和45年開催の大阪万博にあわせて幅員40mに拡幅され、

全線片側3車線の計6車線になっている。

なお、この拡幅工事においては、筋の西側が”軒切り”によってセットバックさせられた。

- ・この谷町筋にも明治44年(1911)8月、天満橋～谷町6丁目間に市電・谷町線が開通したが、昭和19年(1944)6月、戦時体制下での鉄材供出を目的に“不要不急の路線”として廃止された。
- ・さらに、昭和42年(1967)3月、地下鉄・谷町線が谷町筋の下を走り、東梅田駅～谷町4丁目駅間が開通した。その後、昭和58年2月に大日駅～八尾南駅間が全線開通している。
なお、この地下鉄線は、当初、松屋町筋を南下する計画であったが、その後、谷町筋に計画変更された経緯がある。(また、東梅田駅も、当初は梅田駅で御堂筋線と連絡する計画であったが、路盤上の問題から東寄りに路線変更されて独立駅となった)

○「京橋通(土佐堀通)」について

- ・土佐堀川に併行して南側を東西に走り、西区昭和橋西詰交差点から都島区片町橋北詰交差点に至る約4.7kmの主要道

○天満橋駅前の大阪市電について

- ・明治44年(1911)10月、淀屋橋～天満橋間の市電が開通し、天満橋から大阪駅前までが結ばれた。さらに、大正14年(1925)6月には、京阪東口～馬場町間が開通する。
天満橋から東へは、東野田までが昭和7年(1932)7月、守口までが昭和6年(1931)11月に延伸され、西側については、淀屋橋から川口町までが昭和11年(1936)6月に延伸された。
- ・その後、京阪電鉄の淀屋橋延伸や地下鉄谷町線の開通などにより、昭和43年5月にほぼ廃止された。(大阪駅前～大江橋間は一足早く、昭和35年10月に廃止)

○旧「天満橋駅」周辺 … 京橋1丁目(現・「大手前1丁目」)

「京阪電気鉄道ビル」(京阪天満橋ビル)

- ・昭和37年5月、京阪電気鉄道本社ビルとして竣工。その後、本社は平成3年にOBPの「クリスタルタワー」へ移り、現在は、「OMMビル」に置かれている。(平成12年7月・移転)

○淀屋橋への延伸と「天満橋駅」の移設

- ・昭和38年(1963)4月、京阪電鉄が淀屋橋まで延伸された際、延伸部分は天満橋駅手前から地下化され、「天満橋駅」は天満橋筋を挟んだ西側に移転して地下駅となった。
- ・そして、旧・天満橋駅の跡地には、「大阪マーチャンドライズマート・ビル」が建設された。

「大阪マーチャンドライズマート・ビル」(通称:「OMMビル」)天満橋交差点の北東角

- ・大阪市、京阪、竹中工務店などが出資する第三セクターの「大阪マーチャンドライズマート」

(1966年設立。のち京阪の完全子会社に)が建設した複合施設ビルで、昭和44年(1969)8月に竣工。地上22階、地下4階建。高さ約78m。6175坪。
・地上階には、京阪電鉄・本社をはじめ各種オフィスが入居するほか、大小の展示ホールが完備されて各種展示会などに使用されている。又、地下にはレストラン街をはじめ郵便局などが並び、「天満橋駅」(京阪電鉄と地下鉄谷町線)と「京阪シティモール」に直結している。



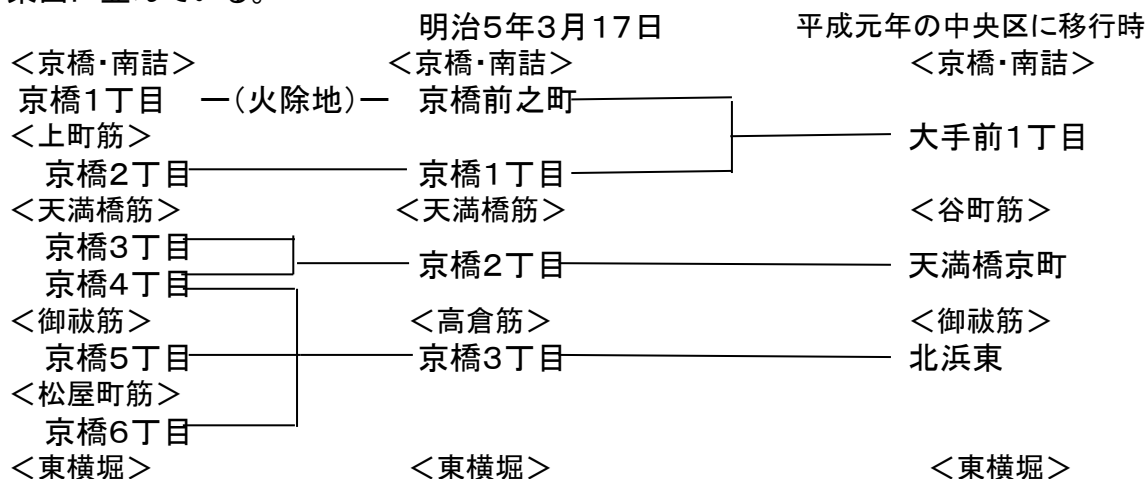
20階には中華料理の「東天紅OMM店」(昭和45年開店)、21階はかつて回転式展望レストランであったが、今は日本料理の「樂待庵」(平成15年開店)の店になっている。

- ・なお、大川に面したビル北側には、昭和58年に就航した大型観光船「アクアライナー号」の天満橋港が設けられていたが、平成20年(2008)3月に天満橋駅北側の大川端に完成した「八軒家浜船着場」へ移設した。

6. 京橋通(土佐堀通)沿いの東西の町 … 新「天満橋駅」の西側

- ・大川に沿った土佐堀通りの両側町として、東西に3つの町が並んでいる。天満橋筋(谷町筋)の東に「大手前1丁目」の一部(もと「京橋1丁目」と「京橋前之町」)があり、天満橋筋の西側

には、「天満橋京町」(もと「京橋2丁目」と御祓筋の西に「北浜東」(もと「京橋3丁目」)の2つの町が東西に並んでいる。



②「大手前1丁目」については、上記を参照

「京橋前之町」(京橋南詰の西側)は、享保9年(1724)の大火後、火除地(延焼防止のための防火用空地)として公収された地で、天文年間、石山本願寺の頃から青物市場が開かれた場所にして、元和一統の後も淀屋个庵の所有地に於て継続開市していたが、慶安4年(1651)にその市場敷地が大坂城地として公収されたため、市場は対岸の片原町に移転した。すなわち、天満青物市場の濫觴の場である。(『大阪府全誌』より)

○「天満橋京町」… 土佐堀通の両側町で、天満橋筋から西・御祓筋までの東西の町

「松坂屋百貨店」と「京阪シティモール」…天満橋駅ビル 天満橋京町1-1

・天満橋交差点北西角地下に移設された天満橋駅の上に建つ駅ビル(地上8階・地下3階)には、昭和41年(1966)10月に「松坂屋・大阪店」が日本橋から移転しオープンした。しかし、恒常的な売上不振が続いたため、平成16年(2004)5月5日に閉店した。

「京阪シティモール」(愛称:「シティモ」)

・折りしも建設中の京阪中之島線の起点駅を天満橋駅と決定し、天満橋に新しい商業施設の必要性を感じていた京阪電鉄は、松坂屋跡地を「京阪モール」(京橋)・「くずはモール」に続く“3番目のモール”として、「京阪シティモール」が平成17年5月にオープンした。
・全12フロア(屋上含む)で、京阪および地下鉄谷町線天満橋駅と直結している。



「大阪キャッスルホテル」 天満橋京町1-1

・昭和42年(1967)1月にオープンしたホテル。
9階建てで総客室数は122室。7階にホテル直営レストラン「リヴィエール」、3階に中国料理店「錦城閣」が入る。

「永田屋昆布本店」と「八軒家船着場の跡」碑

・明治6年(1873)創業の昆布店で、昭和20年6月に戦災で廃止された「八軒家郵便局」の跡地に現在の店が建てられた。
土佐堀通の南に面した店先には「八軒家船着場の跡」碑(昭和40年5月竣工)が建てられている。

・これまでは、この付近が「八軒家浜」とされていたが、最近の調査では、これより西側にあたる天神橋東詰付近であったとの説が一般化している。

・また、店の西側の奥には石垣が残っているが、かつての大川の川岸の名残りで、現在より南側を流れていたのではと考えられている。少し西側には北大江公園に登る石階段が残っているが、こ



れも大川端の荷上場とされた”雁木”のひとつではとされている。

船宿「京屋」と「堺屋」の跡

- ・その石階段の東側に八軒家に数えられる船宿の「堺屋」と西側には「京屋」があった。うち「京屋」については、現在、御祓筋の東側にある「世界チーズ商会」店脇に「大坂八軒屋 京屋忠兵衛跡」の小さな銘板が貼られている。
- ・「京屋」は、新選組の近藤勇・土方歳三らが大阪の定宿としてしばしば利用し、慶応4年(1868)の鳥羽伏見の戦いの後には、追われた新選組隊士らがここに宿泊したあと天保山から江戸に向ったとされる。
- また、「堺屋」は、伏見の寺田屋と提携しており、坂本龍馬が利用したともされている。
- ・安政3年(1856)「水帳」によると、「京屋」は間口11間(約20m)・奥行9間(約16m)、「堺屋」は間口26間(約50m)・奥行9間の大宿であった。
- ・「京屋」は、明治初期に名が「和泉屋」と変っていたが、その後4軒分の店に分かれており、「堺屋」は、明治20年頃までこの場にあった。

「八軒家浜船着場」

- ・平成20年3月に大阪市が、“往時の八軒家浜のにぎわいを水都大阪の再生の拠点とするため”として開設したもので、岸壁には、大阪水上バス、遊覧観光船、屋形船が発着する。平成19年12月に運行開始された水陸両用観光バスの「大阪ダックツアー」が、平成27年1月からここを発着場所としている。桜の宮公園のスロープから大川周遊(天満橋下流までの往復)30分の水上運行が組み込まれている(1便=90分・1日5便)。
- ・地上には、平成21年8月に観光船案内所、情報発信スペース、レストランからなる「川の駅はちけんや」がオープンしており、大川沿いに天神橋まで続く遊歩道が整備されている。

「小楠公義戦之碑」

- ・「大阪キャッスルホテル」と「川の駅はちけんや」の間の大川沿いに、「小楠公義戦之碑」が建てられている。かつては天満橋寄りにあったが八軒家浜船着場の整備に伴って移された。
- <碑文>

「大阪ハ今ト昔ト地勢ガ全ク変ッテ居リ 昔ハコノ大川ノ幅モ広ク 橋ガ唯一ツ架ッテアリマシタ 其位置ハ判然トシテハイマセンガ 今ノ天満ト天神ノニツノ橋ノ中程クライト言ハレテイマス コレヲ渡辺橋又ハ大江橋トイヒマシタ コノ渡辺橋ハ楠公父子ノ戦跡デアリマス 大楠公ハ元弘2年ニ北條方ノ兵ヲココデ敗ラレマシタ 小楠公ハ後村上天皇ノ正平2年 瓜生野ノ戦ニ足利ノ将・山名時氏、細川顕氏ヲ敗リ 逃ゲル敵ヲ此川辺ニ追ヒツメラレ 敵ハ我先キト橋ヲ争ヒ 川ニ落チテ流サレルモノ500人ヲコエマシタ 公ハ部下ニ命ジテ 之ヲ救ハセ 其上11月26日ノ寒天ニ凍ヘフルヘテ居ルノヲ衣食ヲ與ヘ 薬ヲ給シテ京ヘ帰サレマシタ 公ハ翌年正月5日ニ四条躰デ戦死セラレマシタガ コノ時ノ恩ニ感ジテ帰順シタ兵ドモモ皆討死ヲシタデアリマシタ 公ハ忠孝ヲ雨ツツカラ全ウシ シカモカク勇氣ト仁愛トヲ備ヘラレタ コレコソ日本精神ノ化身トイフベキデアリマス 我等ハ天ヤ地ヤ山ヤ川ハイツマデモ変ラヌモノト思フテ居マスガ コノ天地山川モ昔ノママデハナク 当時ノ橋モ岸モ皆変ッテ居リ 其功ヲ立テタ小楠公モ再ビ見ルコトモデキマセズ タダ公ノ敵ヲ愛シマシタ コノユカシイ心ノミハ イツマデモ我が士道ニ華トシテ 我等ノ心ヲウゴカシ 更ニ欧米ノ人ヲモ感ジサセテクノニ我國ガ赤十字社ニ加盟スルコトヲ容易ナラシメヌデアリマス 今ヤ皇紀2千6百年ニアヒ當リ サキ皇運ヲ仰ギマタコノ碑ニ向ヒ 公ノ此心ヲ念フ時 我等モマタ正シク大キイ心ヲ修メテ コノ精平ヲ培フコトヲ勉メヨウデアリマセフカ」

この碑は紀元2600年(昭和15年)を記念して建立されたもので、碑文は、藤沢章の撰文である。(藤沢章は、藤沢南岳の子である藤沢章次郎(黄坡)とされる)

なお、碑文中には、“後年、日本が赤十字に加盟する際にこの故事を引き合いに出し、「赤十字精神の鑑である」と宣伝したためもあって、容易に条約加盟を認められた”との経緯が盛り込まれている。

「尼信天満橋ビル(尼崎信用金庫 天満橋支店)」 天満橋京町1-26

- ・「尼崎信用金庫」(本店=尼崎市)は、大正10年(1921)に「尼崎信用組合」とした創業され昭和49年4月には浪速信用金庫と合併して「尼崎浪速信用金庫」となったもので(平成元年、「尼崎信用金庫」と改称)、昭和60年1月、この地に尼信天満橋ビル(9階建)が建設され、現在は、その1階~3階に「尼崎信用金庫天満橋支店」が置かれている。

「関西美容専門学校」

天満橋京町2-17

- ・昭和22年(1947)、「関西美容理容専門学校」として現在地に設立され、昭和51年に専修学校の認可を受けた。
- ・平成5年(1993)、校名が「関西美容専門学校」に変更され、新築された「KB天満橋ビル」に入った。平成17年には同ビル内に姉妹校として「関西ビューティプロ専門学校」が開校している。

○「北浜東」… 土佐堀通の両側町で、御祓筋から西・東横堀川までの東西の町

「御祓筋」(「熊野街道」)について

- ・渡辺津(窪津)を起点とし、熊野三山への参詣に利用された街道。京から淀川を船で下り、八軒家浜に上陸、御祓筋を南下して四天王寺、住吉大社などを経て熊野に向かっていった。平安時代中期頃から上皇や貴族の熊野詣が盛んになり、後白河上皇は34回、後鳥羽上皇は28回も参詣したと記録にある。やがて武士、庶民もこれに続き、たくさんの人々がこの街道を行き来したため、「蟻の熊野詣」とも呼ばれた。
- ・街道沿いには、熊野権現の分霊を祭祀した“九十九王子”と呼ばれる王子社が設けられ、参詣者は参詣道中の無事を祈念しながら熊野三山への旅を続けたもので、王子社は道標や休憩所としての役割も兼ねていた。

「エルおおさか府立労働センター」(もと「大阪府立労働会館」) 北浜東3-14

- ・大阪府が昭和27年(1952)7月に「大阪府立労働会館」として開設したもので、老朽化に伴って建替えを行い、昭和53年10月に地上11階・地下3階の現ビルが完成するとともに名称を「大阪府立労働センター(エルおおさか)」に改めた。
- ・同センターは、労働組合の健全な発展と勤労者の教養向上および福祉増進に資する集会・催物の場を提供する目的で設立されたもので、結婚式場や多目的ホールの「エル・シアター」(800席)も備えている。また、本館には大阪府労働委員会、南館(平成元年・竣工)には大阪府商工労働部が置かれている。
- ・新ビルの建設工事において豊臣時代の武家屋敷跡が発掘され、現在、東南角に「豊臣氏大阪城内武家屋敷礎石遺構」として一部保存されている。発掘された桔梗紋の瓦から加藤清正の屋敷ではと推定されている。

「大阪衛生試験所」

- ・この地には、かつて「大阪衛生試験所」が置かれていた。大阪衛生試験所の前身である「大阪司薬場」は、官営の医薬品試験機関として、明治8年3月に大手前に創設され、明治13年、中之島に移っていたが、明治20年に「大阪衛生試験所」と改称され、明治31年(1897)10月にこの地に移設された。
- ・昭和20年6月の大空襲で焼失したが、昭和24年に「国立衛生試験所・大阪支所」として法円坂に移転し再興された。

「紀伊和歌山藩蔵屋敷」と「日本郵政グループ大阪ビル 北浜東3-9

「紀伊和歌山藩蔵屋敷」

- ・明暦元年(1655)の「大坂三郷絵図」に描かれており、下記ビル敷地西寄に明治天皇聖蹟碑〔紀州邸址〕が建てられている。これは、慶応4年(1868)3月、大阪に行幸された明治天皇がここ紀州藩邸で休息されたことによるものである。(大正14年5月・建立)
- ・西側の南北筋(松屋町筋)は「紀州街道」と呼ばれ、参勤交代の際は和歌山からここまで陸路北上し、蔵屋敷で宿泊したあと北の浜から淀川を北上または京街道を枚方へ向かった。この北側の浜は、「紀州の浜」とも呼ばれた石敷きの浜で、紀州からの蜜柑船が荷揚げをするとともに伏見への川蒸気船の発着場でもあった。

「日本郵政グループ大阪ビル」

- ・大阪での郵便事業は、明治4年(1871)1月、大江橋南詰の島原藩蔵屋敷跡に開設された「駅通大阪郵便役所」から始まったが、3ヶ月余りでこの地に移設され、明治8年に「大阪郵便局」と改称。その後、為替・貯金・電信業務の取扱を開始し、「大阪郵便電信局」となった。
- ・明治26年12月、中之島2丁目に大阪郵便電信局の新庁舎が建設され移設されたが、この地には「大阪貯金支局」が置かれた。
- ・昭和27年12月、大阪郵政局および郵政局内分室がこの地に移設され、その後、近畿郵

政局(昭和47年に改称)庁舎として現在の8階建てビルが建設された。

・平成19年(2007)10月1日の郵政民営化後は、「日本郵政グループ大阪ビル」と改称され、ビル内に日本郵政公社近畿支社と北浜東郵便局、ゆうちょ銀行やかんぽ生命の大阪支店が置かれている。なお、ビル前には、「日本近代郵便の父」と称される前島密の胸像がある。

「ル・ポンドシエルビル」(もと「大林組本店ビル」) 北浜東6-9

・大林組は大正8年(1919)7月、この地に地上3階建ての本店ビルを建て、北浜から移ってきたあと、大正15年(1926)6月には、4代目にあたる「大林組本店ビル」として、地上6階・地下1階建てのスパニッシュスタイルのビルを建設した。このビルは、茶色の外観が特徴で、大正レトロのビルとして現在も健在である。

当時、大林組は1925年に旧・ダイビル、1927年に現在の大阪府庁舎を建設している。

・昭和48年(1973)1月に新しい「大阪大林ビル」が完成したため移転し、そのあとは、料理専門学校の校舎となっていたが、平成19年11月にフレンチレストラン「ル・ポンドシエル」が開店し、現在は、3階に大林組の史料館が置かれ、4~6階はオフィステナントが入居する「ル・ポンドシエルビル」となっている。

「北浜NEXU BUILD(北浜ネクスビルディング)」(前「大阪大林ビル」 北浜東4-33

・昭和48年(1973)1月、5代目の大林組本店ビルにあたる「大阪大林ビル」が、もと本店ビル向いの地に完成した。

地上30階+塔屋2階・地下3階建て、高さ120mで、西日本初の超高層ビルであった。

なお、このビルにはわが国最初の2階建(ダブルデッキ)エレベータが設置された。上のゲージは偶数階、下のゲージは奇数階に停止する仕組みになっている。



4代目の「大林組本店ビル」



現「北浜NEXU BUILD」

・その後、本店が東京に移され(平成22年)、大阪本店が置かれていたが、平成25年4月、中之島に新築されたダイビル本館に大阪本店が移転し、当ビルは「北浜NEXU BUILD(北浜ネクスビルディング)」と名を替え、オフィスビルとなっている。

「日刊工業新聞大阪支社」 北浜東2-16

・日刊工業新聞は、大正4年(1915)に「鉄世界」を創刊し、同11年に「日刊工業新聞」と改題された。その後、戦時下の新聞統制令によって中外商業新報(日本経済新聞の前身)と統合されたが、戦後「工業新聞」の題字で復刊し、昭和25年に再度「日刊工業新聞」に改題して現在に至っている。

・現在の支社ビル(10階建て)は平成2年5月に竣工した。

専門学校「中の島美術学院」 北浜東6-6

・昭和38年(1963)、「YNアート研究所」として開校し、同41年に「中の島美術学院」に改称した。デザイン学科と造形専攻科を置く専修学校である。

「ナカバヤシ(大阪本社)」 北浜東1-20

・アルバムを中心とした紙製品や事務機器、育児用品の製造販売を行う企業で、大正12年(1923)に創業者の中林安右衛門が大阪市内で製本所を開いたのが始まり。その後、手帳の製造を開始し、昭和43年から販売開始した「フェルアルバム」でその名が知られる。

・昭和45年に商号を「ナカバヤシ(株)」と改め、昭和51年、現在地に本社ビルが竣工した。

「パークタワー北浜」 北浜東4-24

・平成26年9月建築の地上41階・地下1階建(142m)の分譲・賃貸超高層タワーマンションで、総戸数は350戸。